

2 学年講演会報告

——SS 講演会 (理数科学講演会)・人文社会講演会——

■ SS 講演会 (理数科学講演会)

◇期 日:令和3年5月25日(火) 5・6限

◇場 所:至誠ホール

◇参加者:2学年普通科理系・理数科学科 191名

富山大学大学院理工学研究部准教授の石山達也先生に「もうひとつの化学実験！分子シミュレーション」と題して講演をいただいた。

前半では原子・分子の実体に迫る、現代物理学の根幹を成す「量子力学」について教えていただいた。「光は波か、粒子か」という疑問から出発して、動く粒子や物体は物質波として波の状態も伴うという、私たちにとって驚くべき事実を知った。「観測して初めてどちらかに決定する」というコペンハーゲン解釈など、私たちの知らない世界がまだまだたくさんあるのだと実感した。

後半では、分子シミュレーションについて話していただいた。分子シミュレーションと実際のデータで検出したスペクトルはほぼ一致していて、分子を「見える化」する技術に刺激を受けた。

講演の最後に石山先生から「大学で新しく学ぶことにも数学や国語、英語は必要」「どの教科も勉強を頑張ってください」というメッセージをいただいた。実験のためだけでなく、その先の学びのため、知的好奇心を大切に、いろいろなことを学んでいきたいと思う。



■ 人文社会講演会

◇期 日:令和3年5月31日(月) 5・6限

◇場 所:至誠ホール

◇参加者:2学年普通科文系・人文社会科学科 87名

富山大学人文学部人文学科准教授の梅澤礼先生によって「人文学と現代社会—『何になるか』から『何をするか』へ」と題した講演が行われた。先生は19世紀のフランスで、なぜ刑務所の全独房化の法案が下院を通過したのかを、歴史史料と文学作品を分析した著書『囚人と狂気』で、第42回サントリー学芸賞を受賞されたことでも知られている。

講演では、現代と19世紀フランスとを比較してわかりやすく解説して下さった。例えば、19世紀のフランスで大流行したコレラと現在世界規模で蔓延しているコロナウイルスとの比較だ。コレラの流行時、人間ではないウイルスに対する怒りを、罪のないユダヤ人に転換し虐殺したというエピソードは、SNS などを通して他人を糾弾して自粛によるストレスを発散する現代人に通じるところがある。

また、刑務所の独房化という歴史的事実から、現代の私たちの生き方についても考えさせられた。刑務所が独房化された場合には、囚人が精神を病んでしまうというデメリットがあるにもかかわらず、当時のフランスの精神科医たちは、犯罪者には犯罪を犯す素質があると考え、独房化に賛成した。このような考えを、精神科医が説いたというだけで、人々は鵜呑みにした。これは現代に生きる私たちが、深く考えないままに生きていくことに共通している。

講演の最後には、文系理系などの枠にとらわれず活動の幅を広げるべきだという言葉があった。梅澤先生自身が、歴史史料を文学的に分析するという、今までにない方法で研究を続けておられたように、文系理系の枠にとらわれず活動の幅を広げるべきだという趣旨だった。自分の可能性を自ら狭めずに、自分の独創性や、独自の観点を尊重し、現代をよく見つめて生きていかなければいけないと感じた。

